

響流十方さあれば實に阿彌陀如來この通りのことを
常に御しめしなされ元日に限らず一年三百六十五日
かくの如く御呼びづめ下さるなり。

一七一 正月の歌

元旦

ふるこしをたしむ昨日のこゝろだに
あらたまの春はうれしかりけり

○ 正月盡

いさけなきときよりたしみならひこし

むつきのはてぞいさゞかなしき

○ 三月盡

いくちこそせふもかはらぬ身なりせば

またこんはるをたしみやはする

一七二 壬子正月試筆

再迎壬子入王正	但覺即今增感情
席上引賓憐舊友	燈前閱刺問新名
學人歸去無消息	野衲老來纔退生
塵事外猶存志氣	勇猛唯願樂邦榮

一七三 維摩一默

噫天有耳爲何穿

之子無耳眞可羨

假使遲々趣鐵城

牛頭呵責無由驚

佛法畢竟不須耳

維摩一默響轟々

一七四 大晦日の法語

この節期に金を支拂ふに就ても因果の道理をよく知るべきなり。

借りて置かぬものは、借りにはこぬ、借金取が憎くさに家内の者にまで、しかりちらける様になる。實に借金取るも御苦勞ちやと挨拶よくあしらうべきことな

り。賣りて貰うて我が用に間に合はし、こちらから代物拂らはずに置く故に寒氣の中にこりにきて下されたのちやと思ふべきなり。

一七五 除夜吟

賦除夜

三百六十日易過

己如今夕欲終何

草山妙子嘆斯意

壁掛三十一字歌

又

已覺百年心事灰

好懷不問幾回開

門前跡絶雪千尺

了道光陰無去來

一七六 詠 草 集

柿をみて家事の苦勞もいさはじな

しぶさまさればあまさまされり

○

長月のそらもいつまでもち月の

みつれごかけぬためしやはある

○

詠 松 虫

草かりしもこのしづくのしげきぞこ

しらでやなにをまつむしの聲

鹿 ○

いにしへの鹿のそのなる御法にも

洩れてや今に妻をこうらん

○

いにしへを思へばわれもあはれなる

鹿ともなりて妻をこひけん

○

もろこもにあはれと思へもろこもに

彌陀のめぐみのみなみてる身は

○
いましばしたくれさきだつあはれこそ
やがて浄土じやうどのあにたさゝなれ

○
浴中吟よくちゆうぎん

うたへまへ一寸いちゆんさきはやみの夜よ
はやすぞやみの中なかのやみなる

○
夢ゆめの世よさあきらめぬれば我身わがみなき
のちの今日けふなる月つきぞさやけき

○
月つきを賞あづかして

ごふかあまりみつの日ひの夜よのながめより
をさらんものか望月もちつきのそら

○
古いにしへはもごめてだにぞうかりける
今いまはうき身をなげくをろかさ

○
なか／＼にうきめみるこそうれしけれ
さなくばいかに世よをいごふべき

○ 月を見る友こそなけれ中々に

うれし夜すがら御名を稱へて

○ 夜書を読みながら遠き所にて

犬のほゆる聲を聞きて

佛性がなくてはほへず犬の聲

きこゆる夜半の月ぞさやけき

○ 九月十三日夜月前看聖教

いふこゝろを

みほさけのみちさせのちの月かげは

こゝにはありさのりのさもし火

○ 文徳老人身まかれると聞きて

あはれけふ死ぬさは知らじもろごもに

○ 花の下にてゑひしそのころ

○ 蠅を詠める

いつの夜のやこもしろはずはいむしの

わがひざのへにめぐりあひつゝ

○ 十月十三日の夜

わすれてはなげくこゝろも夢なれや

○ ちめの世ささへしればやすきを

○ 世の中

世の中は夢も夢の世の中

○ 思ふこゝろも夢にぞありける

もゝるちるほごけ守る身は狭夜ころも

○ かたしく床は夢にぞありける

ほがらかにひかりのなかにすむこいへば

○ 夜さむのここさみるは夢なり

○ 彌陀たのむひごの死ぬるは死ぬるかは

死ぬこみすれご生るなりけり

一七七 初聞鶯數聲

まちわびてつもるゝうらみもわすられて

いごごうれしき鶯の聲

一七八 題 聞 鶯

柳底聲々好 高呼二月風 陽春兼白雪
新曲屬黃公 分愛招隣叟 嫌驚戒小童
最憐知所止 在我後園中

一七九 餘 寒

梅花欲拆還不拆 將亦與吾心事同
猶擁竹爐加炭坐 踏青何日醉春風

一八〇 春 寒

吹面春風全覺寒 綿裘袖手足蹒跚

江城二月落梅路

恰好只爲飛雪看

一八一 無 題 歌

むかし〜むかしより なれになれたる煩惱の
その御心がやまぬ故 三の界を離れゑぬ
又欲界の末の世に 生れさんした主ちやもの
けがれ不浄も知ばこそ 當ならぬ身を當として
迷はしやんすは理ご わしや思はぬではなけれ共
今にも消ん陽燄の 無墓身にて春の夜の
假寢に結ぶ夢よりも 短き契りせしよりは
主も妾もゝろごもに 今の浮氣をたしなんで

雲時の程を辛抱し
經營事に精出して
御願ひ申し故里へ
男女の差別なく
好な相に六通も
観音さんや地藏さん
御世話になりて日々を
御前百まで私九十九迄
ごんなごさちやひなあ
幾萬年のちまでも

只朝夕に後の世の
在所に御座彌陀さんに
歸つた上で添ふなら
三十の上に二つてふ
自由自在の身となりて
心の知れた御方等の
樂に暮したその上に
こいふやうみちかひ
變らぬ中さなるのみか

平生にす業ごては
寶の池の船遊び
自然に出来る衣を着て
舞をまふや歌をやら
玉の蓮の花摘んで
氣儘に乗りて遠近の
御あげ申しに参つたり
思ふごさへ退ぞかぬ
今日か明日かの程迎は
風さへ埃ぬ白露の

玉の林の花見やら
造作のいらぬ飯たべて
琴の調べや笛の音に
又は砌に咲きそろう
神通さやらいふ籠に
四方の御國の佛さんに
又は無生の定に入り
身ごなるごを樂みに
本に定まるごもなき
散間の事はごもかくも

縁にまかせて一筋に
御名を稱へて詫さんせ
深ひ罪過あるごとも
御慈悲の深ひ御心也へ
實間違ひはないわひな
故郷へいんで爺さんの
私も無明の名を改めて
本より合ふた胸と胸
三つの身ならず四の徳
上は有頂の雲の上

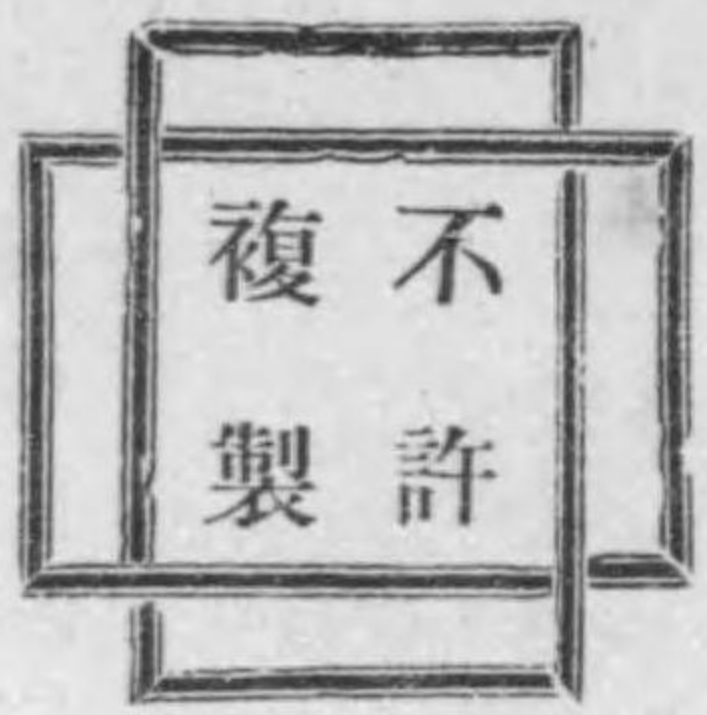
故郷に御座る爺さんの
假令御前にこの様な
可愛と思ふて御座んする
許して迎ひにた出るに
浮れ出たる極樂の
跡目を相續せんしたら
即ち明となるからは
心は一つ二つなひ
十の力もあるなれば
下は無間の釜の底

茲に辛い苦ひ無状なひ
瞋恚の炎さきの聲
飢渴なげき血の涙
鋏の山か火の車
その人達を救ひあげ
昔談に仕様なら

五乗のなやみ四苦八苦
愚痴啖噉の争ひや
氷の海や大紅蓮
巡りくゝて世を渡る
今の苦勞の數々を
うれしひ事であらぞや君

伏明語録終

大正四年十二月一日印刷
大正四年十二月五日發行



著作者 長島淳心

著作者 竹中慧照

京都市下京區中珠數屋町烏丸東入
二十人詰町二十二番戶

印發者兼 西村七兵衛

發行所

京都市東六條電話下四五八番
口座大阪一七〇四番

法藏館

高倉大學寮貫練會諸師批判 擬講園野蘭門師編纂

真宗安心示談

全二冊 定價六拾錢

批者

學 擬 講 師	稻 葉 蓮 德 永 橫 井 太 藤	教 山 弘 鏡 義 統 賢 瑞 順 海	學 師 布 教 使 擬 講 擬 講	竹 越 武 宮 辻 森 土 山 牧 野	徹 道 現 真 要 眼 誓 爽 神	擬 講 擬 講 擬 講 擬 講	園 野 間 野 藤 原 赤 松 飛 龍 東 井 義 天	學 擬 講 師	佐 々 木 靈 秀 岸 本 義 導
---------	-------------------	---------------------	-------------------	---------------------	-------------------	-----------------	-----------------------------	---------	-------------------

虚飾なき同熱誠なる求法質疑して他方安心の極致について

めやくに應答懇話のこれしも批判の任に當れ高倉大學寮の講師
七名なり是れそ天下に於正統安心の發表や苟も一流正義の
眞信に住せんとするもの一讀せよ

擬講 岸本義導師編輯

先德芳談

定價
參拾五錢

高倉の先輩 惠空、香月院、雲華院、香樹院、
香山院其他嗣講、擬講等孰れも 一代の碩學名徳
その一言 梅檀の香を止め一盤 蘭菊の芳を奪ふ、「貫練叢誌」是れを天下
一行悉く本書 教訓あり 安心、心また逸話あり 詩歌あり 先徳の面目紙
に收む、書中 教訓あり 安心、心また逸話あり 詩歌あり 先徳の面目紙
躍如たり若し一本 座右の銘く以て 銷夏の好伴侶たるべ

香月院師肖像及筆蹟寫真版口繪
眞宗大學教授 擬講 和田龍造 今津紹柱 共纂

香月院語録

製本 堅六
全文四號活字
平假名振假名付
總布クローヌ表金文
字入堅牢洋綴美裝
四百五十頁内外
定價金壹圓
郵税八錢

信界の明星宗學の巨人 香月院深勵は天下知らざるものなし其活
ける教化を味深き信仰に觸る世に稀なり和田今津の二師此に觀るあり香月
獵し信念の機微に觸れ他力三百四十條を抄出して本 安心道徳あり
譬喩あり 教訓あり 妙解あり 示談あり 詩歌あり 宗祖の信念蓮師の
道化 網羅せられざるもの須らく座右に備ふべきは本書也

◎道光千載に輝ける珍書出版◎
 香樹院師肖像並墓碑寫真版口繪 無爲信寺所傳臨末遺狀真蹟石版摺
 真宗京都大學教授 大須賀秀道先生編纂

香樹院教訓集

製本 全六寸巾四寸三分
 全文四號活字

平假名振假名付 總布ノロース表金文字入
 堅牢洋綴美裝 七百頁内外

定價金壹圓五拾錢 郵稅八錢

大谷派講師中其道德信念能一代を風靡し又感化百世の香樹院
 龍師に及ぶものなし本法師語教誡の粹を拾ひ集めて世の求道者座右
 の銘に供せざるものなり

本書は別に變りた信仰を發表したものではない實に四百年前蓮如上人に顯れ、
 七百年前開山聖人に現れ給ふた落ちる一の御助けと云ふ、如來他力の信仰の表
 白であります
 此信仰は曾て支那に於て善導大師を救ひ又曇鸞、道綽兩大師を活して下され、
 印度に於て龍樹大士に輝き、又世親菩薩に一心歸命せしめて下された、盡十方
 無碍の光明と同一のものであります

定價金壹圓八拾錢

全 六 冊

四 號 活 字

平 假 名 付

一 千 四 百 頁



他方安心示談

今井昇道師著

絶對の眞理は彼の本願の爲に人種を選び、智慧を簡ひ玉ふ事がありません故に
 世界に至る所に等しく現し、太古未開の時にも完全に顯現し給ひます、二千五百年に
 の昔にも完全に顯現し給ふた徳無識の著者にも圓滿に照被し給ひました、印度ア
 、ルヤ人族に顯はれ給ふた徳無識の著者にも圓滿に照被し給ひました、印度ア
 給ひます、さらば珍しからぬ信仰、普遍なる信仰、平凡なる信仰こそ反て、絶
 對無碍の信仰であるを私共は信じ奉ります
 願はくは絶對無碍の信仰を求め絶對常住の安立を得んと思ふ人は、此落る一で御
 助けと云ふ、平凡普遍なる著書の宗教的經驗を讀め

發行所 東京都東區六條 電話 下四八番 法藏館

今井昇道師新著

我安心

定價金參拾錢

今井昇道師著

南無の釋

定價金拾八錢

今井昇道先生著

病中感謝錄

定價參拾錢
本誌讀者郵稅不要

今井昇道先生著

一蓮院談合錄

定價參拾錢
本誌讀者郵稅不要

六

『我安心』は「他力安心示談」の續編であり、唯彼は誌上に解答したるものなるに對し、これは直接書信を以て熱烈なる求道者の不審に答へたものであります。珍らしき議論嶄新なる法門を求むるものには免まれ眞實永劫の問題に迷惑しつゝある方には本書は多少の資糧を捧ぐるであらうと信じます。

著者 今井昇道 敬白

本書は蓮如上人の御作と傳ふる南無の釋七十二種と樋口重三氏の一百十二種と私の釋いた二百五十種程を蒐集したるものであります。たのむものを助くることある。絕對他力の智慧は、佛智不思議の問題であるから人間を助かる事は、永久に救濟の功と無要との間を助かること、出來れば猫の杓子も皆助かるやうになること、此條件とすれば永劫にも助かるやうな節がないこと、云ふ事になれば求道者が常に泣く所は實に此難關である、本書は此問題に對して最後の解答を與へる、此難關を通ると思ひます。關鍵を貸すものであるまいか。

著者 今井昇道 敬白

本書は私の宿病を三州宮崎の海岸に靜養せる際、の感想五十餘條と爾來今日に至るまで同行善知識の口より書より自ら有難しときき拜見したるものを百餘條集したものであります。本書は絕對他力の信念を各人各已に顯してありますから一見殆反對の觀もないでもないが若之をよんで何れも難有う拜見出來るならば其人の信念は已に圓熟の境に達したものであらと思ふ。願くば道に志すの士は之によりて自己の信念を養ひ又信念の熟未熟を試むるの具とし給はんことを。

本書は一蓮院師の心弟なる信次郎士の物語れる同師の絕對他力の信念の告白なり懸値なき師の心中の懺悔なり絕對他力教の名師多しと雖生涯を通して求道的なる師の如きは稀なり苟も道に志すものは僧俗と云はず老少と云はず是非日夜三讀して其信念を涵養すべきなり。

七

發行所 東京六條大坂口 電話 四七〇番 法藏館

發行所 東京六條大坂口 電話 四七〇番 法藏館

講師法話叢書

<p>第一篇 ▼ 一題香月院法話 定價拾八錢</p>	<p>第二篇 ▼ 香月院安心示談 定價拾八錢</p>	<p>第三篇 ▼ 改悔批判法話 定價拾八錢</p>	<p>第四篇 ▼ 報恩講法話 定價拾八錢</p>	<p>第五篇 ▼ 三講師法話 定價拾八錢</p>	<p>第六篇 ▼ 四講師法話 定價拾八錢</p>	<p>第七篇 ▼ 千巖講師法話集 定價拾八錢</p>
<p>發行所 京都下市東六條 電話大阪一七〇八番</p>						

325
385

終

